地域の伝統的な祭りにおける紙と絵具で作られた灯籠の制作・素材に関する造形的研究　その１

The modeling study on production and material in the local tradtional festival of lanterns made with paper and paints　Part 1

吉川　賢一郎
KIKKAWA Kenichiro

キーワード：地域、伝統的な祭り、灯籠の装飾、素材、制作方法、造形的視点
Keywords：Regional activation,Traditional fastival,Decorative lanterns,Material,Production method,Modeling perspective

This article examined Lanterns made of painted Japanese paper with light burning inside can be seen in local festivals. In this research I aim at the light sources of lanterns and their materials such as the japanese paper,paints,frames in order to utilize my research for production,preservation and restoration of lanterns.I'd like to indicate characteristics of the peculiar aestehtic valuation and modeling rooted in each region and devices by comparing,examining and investigating the history of lanterns with the flow of time and social changes.The festivals perfumed in all over Japan are compounded form various factors,however,we could share information matually by this presentation of my research,and festivals could change. I would like to contribute to the scuccession of festivals in the future and activate regions securing the originality of the traditional festival-lanterns.

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

写真７

写真８

写真９

写真10

写真11

写真12

写真１．村上市細工町区の地蔵様祭りの灯籠：研究のきっかけとなった灯籠
写真２．村上市細工町区地蔵様まつりの風景
写真３．村上市大町区七夕屋台の見送り雪洞（ぼんぼり）：筆者制作の威風堂々群鶏図
写真４．村上市小町区七夕屋台の全形
写真５．江戸時代から明治初期にかけての弘前ねぷた：弘前市　津軽藩ねぷた村
写真６．青森ねぶた：青森市　ねぶたの家ワラッセ
写真７．弘前ねぷた：弘前市　津軽藩ねぷた村
写真８．能代役七夕の七夕灯籠：能代市　能代エナジアムパーク内ねぶながし会館
写真９．立佞武多（たちねぷた）：五所川原市　立佞武多の館
写真10．福野夜高祭の夜高行燈：南砺市　福野文化創造センターヘリオス
写真11．刈谷万燈祭の万燈：刈谷市　銀座万燈蔵
写真12．飯田灯籠山（とろやま）祭の人形灯籠：珠洲市　飯田町灯籠山保存会倉庫
写真13．奥能登のキリコ：輪島市　キリコ会館

写真13

１．はじめに

１－１．研究の学術的背景

地域の伝統的な祭りでは、骨組に和紙などを貼って染料や顔料の絵具で絵や文字を描き、内部に明かりを灯す透過性のある形態の「灯籠」が今も各地で数多く使われている。本来、手持ちや備え付けで照明器具として使用されていた簡素な角灯籠が、時代と共に複数の要素と融合して展開し、地域独自の美しさを持った装飾が施されるに至り、その造形的に優れた灯籠が伝統的に継承され、祭りを通し各地域の象徴的な存在として地域活性化にも貢献している。

一方で、人口の減少や高齢化や少子化などによって祭りの担い手が激減し、町内以外からの参加者を募集していることも事実である。そのため、伝統の継承が途絶え、全国的には祭りの存続自体が危ぶまれている地域も多数あり、独自性のある地域の祭りの消滅が危惧されている。

ところで、私の故郷である新潟県村上市では、江戸時代から続く雪洞（ぼんぼり）と呼ばれる灯籠を装飾した屋台 19 台を巡行する七夕祭が例年８月中旬に行われている。私も幼少から町内で揃いの法被（かぶ）を着て屋台を夜遅くまで曳き回し、学生時代は獅子頭を被って舞を踊り、祭りが終わったその瞬間から来年がもう待ち遠しかった経験を持つ。ところが、日本海側の夏は雨天の日が多く、各町内は降雨対策に苦慮している。雨除けとして屋台全体を透明なビニールで保護するものの、それにより壮麗さが損なわれ、祭りの華々しさは失われる。ある町内会で昭和 50（1975）年頃から使用している地蔵様祭りの絵灯籠（写真 1）に関する相談を私が実際に受けたことを端緒に、ビニールを掛けずに雨に強い灯籠を作り出すにはどうしたらよいのだろうか、日本全国の祭りはどのように対応しているのだろうか、という疑問が本研究の出発点でとなっている。

本研究では、グラフィックデザイナーでもある研究者が、地域に貢献できることは何かを考えたものである。伝統的な祭りで使用される灯籠の制作・素材の選定・保存・修復に活かすため、素材となる光源・骨組・和紙・絵具といった素材や材料に着目して、多様化した灯籠の装飾における現状を、造形的な観点から現地調査と比較研究を通じて総合的に検討し、地域の価値を指し示そうとするものである。

なお、伝統的な祭りの事例報告は数多くあるが、灯籠の分野を対象とした事例報告は少ない。江戸川大学・阿南透による「ねぶたの題材の変容」[注1]、「芸術としての青森ねぶた」[注2]、神戸工科大学・杉浦康平らによる「アジアのデザイン文化の比較研究 山車の造形と祭礼文化を中心として」[注3]、黒川朋広らによる「千葉県佐倉市の山車祭りに見る都市の祭礼空間とその利用に関する研究」[注3]、目白大学・鈴木章生の「都市祭礼の伝統と変容」[注4]、熊本大学大学院・山口修らによる「都市における祭礼空間の研究：山鹿灯籠祭りについて」[注5]など、山車の構造や祭礼空間、ねぶたに限定した題材に関する事例報告はあるものの、広い意味で灯籠の制作や素材、灯籠における内的外的要因の変遷、地域間の比較を行った報告はない。そこで私は、地域の伝統的な祭りにおける紙と絵具で作られた灯籠の制作・素材に関する本研究を進めたいと考えている。

１－２．研究における言葉の定義と研究の範囲

本研究において研究対象とする灯籠は、内部に照明を灯し、外部は竹や木材などの骨組に和紙等を貼って染料や顔料の絵具で絵や文字を描き、透過性のある形態とした。灯籠の類義語には燈籠（とうろう）、灯篭（とうろう）、燈篭（とうろう）、行灯（あんどん）、行燈（あんどん）、万燈（まんど）、万灯（まんとう）などがあるが、本研究においては、それらの総称として「灯籠（とうろう）」と表記した。但し、秋田竿灯（かんとう）祭りのように提灯（ちょうちん）を中心とした祭りも考えられるが、ここでは提灯自体に装飾を施さないため、このような祭りを本研究では対象外とした。なお、祭りの灯籠には大きく分けて固定式と移動式の使用が考えられるが、いずれの灯籠も扱うこととする。

また、伝統的な祭りとしての研究範囲は、国、県、市、町、村から民俗無形文化財の指定を受けたものとした。青森県青森市のねぶた祭り、弘前市の弘前ねぷた祭り、五所川原市の立佞武多（たちねぷた）、秋田県能代市の眠流（ねぷ）し行事七夕灯籠、秋田県鹿角市花輪の花輪ねぷた、山形県酒田市の酒田まつり、新潟県村上市の七夕祭と地蔵様祭り、富山県南砺市の福野夜高（よだか）祭と小矢部市津沢、砺波市庄川・出町、射水市黒川、富山市岩瀬の夜高祭、魚津市のたてもん祭り、石川県奥能登地方のキリコ祭り、石川県珠洲市の飯田燈籠山（とろやま）祭、愛知県刈谷市の刈谷万燈祭、熊本県熊本市の山鹿灯籠祭り、鹿児島県鹿児島市、宮崎県都城市の六月灯などが研究対象として挙げられる。なお、これらの祭りの中には、祭礼ではなく年中行事が含まれること、村上市の七夕祭や地蔵様祭り、鹿児島市と都城市の六月灯のように伝統があるものの無形文化財の指定を受けていないものも含んでいることを述べておく。

１－３．研究の社会的意義

研究目的で定義した灯籠は今も各地で数多く使われているが、素材や制作方法、維持と展開に対する考え方は各地域や町内によって異なっている。

一方、このような灯籠が使われている地域では、高齢化や少子化による祭り参加者の減少に伴って、次世代に様々な祭り運営に関する情報の伝達が困難となり、祭りの文化を継承して行くだけでなく、灯籠の制作における新技術や新素材、新たな題材の導入が難しくなっている。また、多くの祭りが他の町内よりも優れた灯籠を制作したいという競技的な側面があるものの、制作方法などにおける情報は制作上の機密とされている場合がある。そこで伝統的な祭りの継承はもはや現状を維持するだけでは継続が難しいといえる。本研究においては、灯籠を用いる各祭りが、現時点においてどのように問題を造形的に抱え、それを乗り越えようとしているのかを全国を横断的に調査し、その糸口を見出した上で解決のあり方を示そうとするものである。

古くから、自地域の祭りを向上させようとする内的指向性によって、祭りにおいて新素材等の導入は比較的積極的に行われて来た。加えて、祭りの復活や立ち上げといった地域間における対外的な情報の交換が、これからの伝統的な祭りの文化継承にも必要であると考える。伝統的な祭りは保守的な側面を持つ一方で、常に新しいものを取り入れて進化した歴史的背景もあり、新しいものを取り入れる素地は潜在的に備わっていると考える。

なお、研究では新しい素材や技術の動向を追求する一方、受け継がれてきた素材や技法にも手掛かりや意味があるのではとも考えている。つまり、本研究では従来からある素材や技法と新しい材料や技術を比較し、両者を結びつける

ことで伝統を踏まえた祭りにおける造形の新たな方向性を探るものでもある。

１－４．研究の方法

本研究は、伝統的な祭りで使用される灯籠の制作・素材の選定・保存・修復に活かすため、素材となる光源・骨組・和紙・絵具といった素材や材料に着目して、多様化した灯籠の装飾における、素材、制作方法、題材、大きさ、祭礼空間、天候対策等の現状を、造形的な観点から現地調査と比較研究を通じて総合的に検討し、地域間の差異や長所、特色を指し示すものである。そして、各地域の比較研究から各灯籠の成立背景と造形的要因などを明らかとし、時代の流れと社会の変化における変遷についても現地調査を通して、各地域の比較研究から現時点における制作動向と技術のあり方などを明らかとする。なお本研究は、数年に渡り祭りの行われる現地において祭りの実体を調査し、加えて文献の読解と考察、デジタルメディアからの情報収集、各地域の比較調査を並行して進め、最終成果を公表して行く予定である。

２．調査の内容

実地調査は平成 25（2013）年から行っており、現在までに、青森県青森市のねぶた祭り、弘前市の弘前ねぷた祭り、五所川原市の立佞武多（たちねぷた）、秋田県能代市の眠流（ねぶ）し行事七夕灯籠、新潟県村上市の七夕祭と地蔵様祭り、富山県南砺市の南砺福野夜高（よだか）祭大行燈、石川県奥能登地方のキリコ祭り、珠洲市の飯田燈籠山（とろやま）祭（まつり）、愛知県刈谷市の万燈（まんど）祭（まつり）、鹿児島県鹿児島市の六月灯（ろくがつどう）、宮崎県都城市のおかげ祭りについて実踏調査している。但し、祭りの開催当日は安全を確保するために担当者が緊急対応に追われ、制作等の詳細を聞くことができないため、現地調査は祭りの準備期間中等にも重ねて実施した。なお、この調査に併せて現地における資料館、展示館において資料調査を行い、加えて祭りの保存会、制作者、保存倉庫における取材も行った。

これらは現地でしか知り得えない情報や資料、その地域の歴史や変遷などを獲得することのできる重要な調査である。

３．全国の灯籠を用いた祭り

３－１．灯籠を用いた祭りの概要

全国各地には様々な灯籠を用いた祭りや行事、イベントがある。祭りと呼ばれるものには祭礼と年中行事があり、各地における様々な要素と融合し伝統を維持しつつ、時代と共に変化して開催されている。同様に、祭りに用いられる灯籠も箱形の灯籠が多様に変化した様子が参考文献などから汲み取ることができた。

特に、古くから続いている祭りの多くは、青森県から石川県にかけての日本海側に集中している。祭の種類、灯籠の用い方、形状はさまざまだが、いづれも灯明を夜の巷に曳き出したり担いだりしていることでは共通する（参考6）。祭礼においては石川県のキリコ祭りのように、神様の神輿や山車を先導する役目としてのあかりの役としている灯籠もある。

３－２．灯籠の成立と展開

松明（たいまつ）と燎火（りょうか）は木材を燃焼させて光源とするもので、最も原始的なまた最も簡便な我々人類の発見した最初の燈火である。携帯用の松明は提灯に、固定の燎火は行灯へと変化していった（参考 26）。室町時代末期には、神事における迎え送りの火を照明として用いていた藁炬火（わらたいまつ）を灯籠に改めたという記録がある。灯籠の方が実は見た目には美しく、また前の宵から飾っておいて祭りを営むのにも華々しかったので、紙、絵具、蠟燭が手に入りやすく、また若者の手工が進むとともに、おいおいにこちらへ進んでいったとされる（参考 27）。

現在用いられる灯籠は、照明としての箱型の形状をそのまま維持して祭りの道具として用いられたもの、箱型の灯籠が大きさを変えて大型化したもの、手持ちの形態は維持しつつも形を変えて子ども達が持つ道具として使用されているものなどが多い。大型化した弘前のねぷたや青森のねぶたも本来は箱型の手持ち灯籠から少しづつ変化していった。

４．各地の祭りと灯籠の変遷

以下、参考文献の読解と考察、実地調査の結果を踏まえ、各地域の伝統的な祭りにおける灯籠の変遷について報告する。

４－１．弘前ねぷたと青森ねぶた

概要：青森県内のねぶたは「七夕祭」と津軽にあった風習である精霊送り・虫送りなどの行事とが一体化し、紙・竹・ローソクの普及によって灯籠を作り、更にはそれが集落や村などの競い合いによって少しづつ大きくなり、扇ねぷたや人形ねぶたになったと考えられている。

灯籠が作られる以前は、豆の葉や合歓（ねむ）の葉などを棹に結んだりして練り歩き、眠気を誘う邪気や魔霊を追い出す素朴なマジナイだった。現在扇形をした弘前ねぷたは、大正時代中期までは人形ねぷただったと言われている。更に、江戸時代に比良野貞彦が著した『奥民図彙（おうみんずい）』に描かれた風景画「子ムタ祭之図」がねぷた運行の初見とされるが、ここには灯籠を担いだり手に持っている姿が描かれているものの、今日の人形ねぶたや扇ねぷたは見られず、箱型の灯籠を基本としている。箱型から人形型に移行した時期は諸説あるが、文化・文政期頃、もしくは江戸時代後期から末期にかけてと推測されている（参考4、14、28）。

考察：青森県内のねぷた・ねぶたは、祭礼ではなく年中行事として伝承されて来た。つまり、ねぷた・ねぶたの発展は、これが形式を重んじる神事としての祭礼ではなく、箱型の灯籠を町人たちが自由な発想によって少しづつ形状を変えて人形型の灯籠や扇型の灯籠へ定着させていったことが大きな要因と考察することができる。

４－２．黒石ねぷた

概要：黒石地方のねぷたも古くから装飾的な灯籠を用いて実施されてきた年中行事であり、天明６（1786）年の『山田日記』の記事に「七夕祭、例年の通り賑々敷」と見えるのが最も古い記録とされ、ここでの七夕祭と書かれた記事が、ねぷたのようである。さらに、天保２（1831）年から明治３（1870）年まで書かれた青森県黒石市に伝わる『分銅組若者日記（ぶんどうぐみわかものにっき）』には、ねぷたの記事が度々見える。この文献は分銅組（上町組）火消衆の若者に関わる当用日記である。この日記は当時の世相を伝えると共に、100 点に及ぶねぷたのスケッチを残す。

黒石のねぷたではひとり持ちの棒が基本であったが、天保12（1841）年には山形町消防組で高さ９間（16.4m）、横３間（5.5m）のものが出現している。また、ねぷたの題材も年によって様々であるが、大黒天、天狗、牛若、浦島太郎、宝船、扇灯籠、鳥籠、金魚などが黒石に所在した五カ組の消防組によって制作・運営されたことを記す（参考28）。現在でも60台を超える扇ねぷたと人形ねぷたが共存しており、黒石ねぷたの特徴といえる（参考4）。黒石でねぶたの運行は消防組が中心となっていった。『分銅組若者日記』がねぷたについて記録したのは、ねぷたが火を扱うためで、消防の仕事の一つである火の管理が記録を残す理由のひとつでもあった（参考29）。

考察：黒石ねぷたの変遷から類推できることは、江戸時代のねぷたはロウソクの火で明かりを灯していたため、頻繁に火災が起き、組織化され信頼される消防組がねぷたの制作から祭りの運営までを担当することによって、街の安全が確保されたことである。そこから、江戸時代の町火消の象徴でもある火消の纏と箱型の灯籠が融合し、大型化していったということが考察できる。他の地域においても、華美や財力、力自慢を鼓舞し、競い合うために灯籠が大型化した例は多数見（やく）られる。

４－３．能代役七夕の七夕灯籠

概要：能代役七夕は、市内の５町内が毎年順番に当番を決め、城郭を形どった灯籠を台車に載せて町中を曳き回し、最終日には灯籠頂部の鯱飾りの部分に火をつけ川に流す祭りである（参考27）。眠流しの語源は「眠（ねむ）た」から来ている。夏越し祓（はら）えのために形代（かたしろ）（人形（ひとかた））を流す神送りの行事が、夏期の睡魔を追う行事として発達したものである。寛保元（1741）年に宇野親員（ちかかず）が著した『代邑見聞録（だいゆうけんぶんろく）』には子ども達が灯籠をつけ太鼓や鉦笛を演奏し町中を廻った様子が記載される。灯籠の形態は文化・文政期の担ぎ灯籠から屋台人形と様々であった。文化12（1815）年に淀川盛品と那珂通博が編んだ『羽州秋田風俗問状答』には、年々新奇を競い町民が形にこだわらず、工夫を凝らして灯籠を作っている模様が伺いとれる。天保期に入ると、大工宮越屋嘉六によって名古屋城を模した城郭型灯籠が登場し、好評を博したと伝えられている。また、疝遊亭（せん）扇橋という落語家が天保13（1842）年に能代で見聞した七夕灯籠は『奥の枝折』によれば、高さ５丈８尺（17.6m）、広さ３間四方（5.5m）くらいの大七夕をつくること、それは神功皇后の三韓退治や加藤清正の朝鮮征伐などさまざまな形をつくることとしており、津軽・弘前・黒石・青森のねぶた・ねぷたに近いものであったことが分かる。（参考10）

考察：能代では現在の七夕灯籠の巡行でも箱型の田楽灯籠が行列の先頭に構成されている。また、平成24（2012）年には市街地の電線地中化を機に、能代市の支援によって５丈８尺の大型灯籠を復活させる試みがなされ、平成25（2013）年には５丈８尺の大型灯籠の運行、平成26（2014）年には24.1ｍの「愛季（ちかすえ）」が完成し、五所川原の立佞武多の23mを超えた大きさとなっている。明治40（1907）年頃、青森県内でも有名な豪商や大地主の力の象徴として五所川原の立佞武多は約10～12間（約18.2～21.8ｍ）まで大型化したが、大正時代に入り電信・電気の普及、即ち、町中に張り巡らされた電線のため、立佞武多は小型化した。五所川原の立佞武多の原型を私は実見できていないが、弘前ねぷたと青森ねぶたに見られるように箱型の灯籠を原型とするならば、過去においても現代においても、両地域の灯籠は街の繁栄だけでなく、その土地の人々の性格や気質も表していると考察することができる。

４－４．福野夜高祭（よだかまつり）の夜高行燈

概要：富山県南砺（なんと）市福野の夜高行燈の始まりは、慶安５（1652）年、福野神明社に伊勢から御分霊を勧請（かんじょう）して氏神を祀ることになった際、行燈を手に持って迎え出たのが始まりとされる。福野の夜高行燈は「御神燈（ごしんとう）」「神迎（かみむか）え」「献燈（けんとう）」「燈鉾（とうほこ）」「敬観燈（けいかんとう）」などと呼ばれており、本来神事としての行燈である。初めは軒灯燈や八寸紙１枚を張った手に持つ小さな田楽行燈（れんがく）であったが、19世紀に入って福野の町人達がかなりの経済力を持つようになったことが伺え、行燈もそれに伴い、高くて大きいものになっていったとされる（参考２）。レンガクはデンガクと呼ばれる場合もあり、本来の形は、棒の先に小さな四角い行燈をつけて持ち歩くものである。今も砺波平野一帯の田祭や夜高祭で、子ども達がこれを立てて歩く姿が見られる。行燈の上に棒が少し突き抜けており、田楽豆腐に串を刺す様子、または行燈の形が田楽豆腐に似ていることから「デンガク」と呼ばれるようになり、これが訛って「レンガク」となったらしいとされている（参考11）。

考察：福野にも夜高行燈が大型化した記録がある。文久２（1862）年に福野神社神輿渡御御巡幸の大傘鉾を模装し、３町内が高さ４丈（12.1m）の大行燈を出した。弘前、青森、五所川原、能代と同様に大型化した行燈は、明治25（1892）年に電信線が張られた影響により明治43（1910）年には２丈１尺（6.4m）にまで縮小した。現在の行燈は上部に備え付けられていた部品が圧縮した形状になっており、取材時に違和感を感じたが、歴史的な変化が影響していることを知り納得することができた。平成14（2002）年、福野夜高祭350年の記念事業の１つとして高さ12.1mの「文久の大行燈」が復活したが、原型となる箱型のレンガクと比較してみると他の地域同様、形状や大きさの変化に驚かされる。

４－５．奥能登のキリコ祭り

概要：奥能登の祭りは、宵祭り、夜祭りが多く、神様の渡御（とぎょ）に際して、「奉灯」「オアカシ」「高張提灯」などが灯され、「柱松明」などが焚かれて人神一体の祭りが行われている。このような明かりが現在のキリコになったものであろうというのが大方の説である。レンガクは、神輿渡御のあとさきに供奉（ぐぶ）し、道中は神輿の四隅にあたる位置を照らすと同時に、神様をお守りするのである（参考６）。

奥能登の中心的な都市で漆器の町として全国に知られる輪島の夏期大祭では、神幸行列の最前列に子どもらの集団が持ち歩く「笹キリコ」が見られる。４～５ｍほどの笹竹の上部に高さ45㎝、幅30㎝、厚さ15㎝程の小さな行灯をつけたものだが、この笹キリコこそ「切籠（きりこ）」の原型、ルーツと言われてきたものである。一人持ちの笹キリコが数人で持ち歩く４本柱の竹キリコとなり、やがて恒久的な使用に耐えられる木製となり、富来町（とぎまち）の八朔（はっさく）祭りや酒見大祭などにおいて今でも見られる直方体で簡素な担ぐ奉燈のレンガクへと発展したものと考えられる（参考７）。なお、正保３（1647）年の輪島市鳳至町（ふげしまち）の住吉神社『祭礼定書』に、

切籠が神輿のお供をしている記録があり、これは笹キリコまたは担いで運ぶレンガクであろうと推測されている（参考11）。
考察：キリコ祭りにおける変化は、他の地域程は激しくはないと言える。４－１の考察でも述べたように、青森県内に見られるような年中行事としてのおおらかな祭りと比較すると、奥能登のキリコ祭りは神事祭礼としての厳格さの中で生まれた形状である。また、その背景には４－５の概要でも述べたように、漆器の産地である輪島の漆芸技術が融合し箱型の灯籠が変化していったのは、地域の持つ特性が形態の独自性を際立たせていると言える。

４－６．飯田灯籠山祭りの灯籠山

概要：奥能登はキリコが集中的に分布する地域であるが、この祭りだけがキリコとは全く異なる行灯の山車を出している。灯籠山の本来の形は、二層式とする曳山の屋根上に高大な灯籠を立てるものである。灯籠は四角い行灯を積み重ね、一番上に人形を配すもので、行灯で様々な形を作るところはキリコよりも富山県の夜高や岩瀬曳山車に類似している。灯籠山の古い記録としては、珠洲市飯田春日神社に所蔵される葛原秀藤の『秀藤日記』文政８（1825）年条にある飯田春日神社年式祭（臨時祭）の記事に「細長燈籠」「小角燈籠」「長燈籠」「六月祭礼の燈籠」などが出されたとされ、この内「六月祭礼の燈籠」が灯籠山につながるものと言われている（参考11）。
考察：この祭りでも灯籠が大型化した記録が残っている。大正３（1914）年の電線設置により人形灯籠を載せた高さ約16mの灯籠山は、人形を外し山車を引き回されるようになったが、昭和58（1983）年には有志によって昔の写真や資料をもとに灯籠山の人形灯籠が復活された。現在では飯田灯籠山保存会が結成され、人形灯籠などの制作教室が開かれ、後継者の育成にも力を入れている。なお、珠洲市飯田町では灯籠山祭とは別にキリコ祭りも行われており、人口が減少する中で複数の祭りを維持することの苦労が感じられる。

４－７．刈谷万燈（まんど）祭の万燈

概要：愛知県刈谷市の万燈祭で使用される万燈は、刈谷市銀座に所在する秋葉神社の安永７（1778）年における火難防除・町内安全を祈願する祭礼に初めて登場する。当時は箱型の角万燈に「御祭禮」と書いた簡単なものと思われ、長い年月を隔てて絵を描き、現在の膨らみを持たせた歌舞伎万燈または武者万燈へと変わっていった。明治38（1905）年頃、澤梅谷によって描かれた「秋葉神社御祭礼之画」には膨らみを持たせた万燈が登場しているが、いつ頃から変化したものか定かではない（参考８）。
考察：前述した黒石ねぷた（参考28）には、刈谷の万燈によく似た人形灯籠のを示す『分銅組若者日記』の挿図が出現している。また、大正時代末期から昭和時代初期頃に撮影された青森における一人担ぎのねぶたを示す絵葉書（参考27）が残る。刈谷の万燈は台形の台の正面に人形をせり出して配するが、この葉書のねぶたは台座となる上に人形を載せており、非常に両者は類似している。青森県のねぷた・ねぶたを参考にしたという文献は残ってはいないが、箱型の手持ち灯籠が競い合って華美になり大型化していく過程も類似している。

秋葉神社の火難防除・町内安全を祈願する祭礼において、火消衆の使う纏が大型化し華美になって万燈として進化し、加えて火難防除を願う舞を奉納したことが、刈谷の万燈を手持ちのまま残したものと考察する。

５．おわりに

今回の研究報告では、研究概要と過去の文献や調査資料が残る地域の灯籠の変遷を中心に行った。

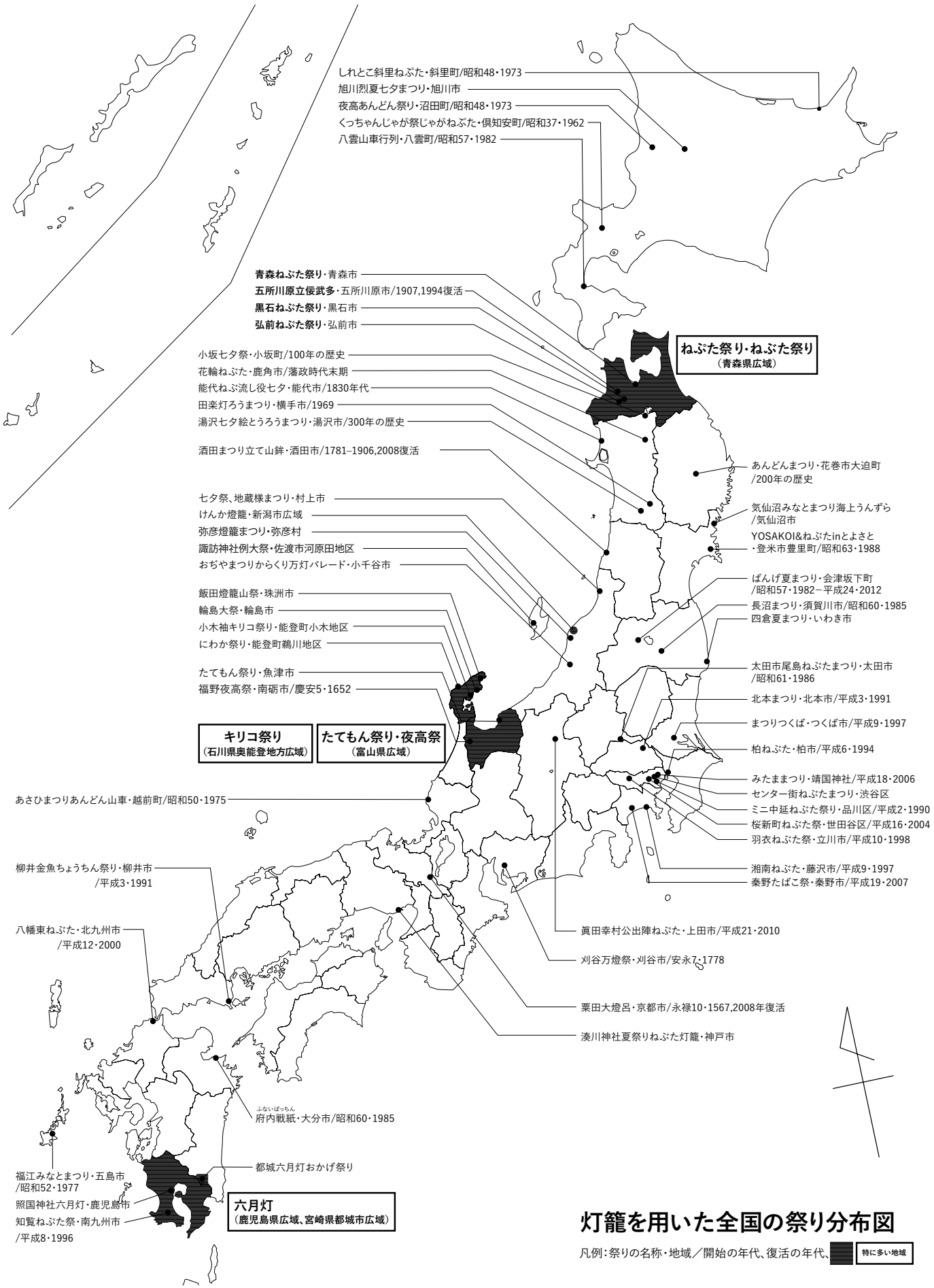
灯籠が多様化した要因として、江戸時代に和紙やロウソクが普及し入手しやすくなったことがまず第一に考えられる。当時灯籠の灯りはロウソクの火であったため、祭りの際には頻繁に灯籠の燃える火災があったと考えられる。その面で、黒石の事例にもあるように火消衆の存在は大きく、一人持ちの灯籠が大型化した要因は火消の象徴である纏が、形状や使用方法に影響していると考察することが出来る。また、政治が安定し経済的にも文化的にも豊かになり、祭り灯籠を華美な装飾と大型化させることによって財力や力自慢を周辺他町内の灯籠や、他地域の灯籠と競い合うようになったと見ることができる。

ところが、明治時代末期から大正時代初期には電気や電話の普及によって各地域の祭礼空間に電線や電信線が架されたため、大型化していった灯籠は祭りの運営上縮小せざるを得なくなった。伝統とは継承していくものであるが、祭りの灯籠における変遷を通して、伝統は形状を維持しつつも、時代の流れに合わせて変化させていかざるを得ないものなのだと実感した。そうした中で地域の人々の力を結集させて行われた祭りには時が経った今も、先人達への尊敬や憧れと創作エネルギーの気迫を魅力的に感じる。

灯籠が大型化した歴史を持つ地域では、人々の熱意によって残された写真、資料から現代にその姿を蘇らせている事例が多々見られた。その熱意が自治体や組織を更に動かし、電線の地中化、区画整理、制作のサポート、展示施設の建設にまで展開し、祭灯籠が街の活性化の役目を担っている。一方で、宗教活動の一環として行われている神社の祭礼は自治体が財政的助成をすることが出来ないものの、祭りが大きなイベントとなる傾向にあり、祭りを継承するため、運営上の課題もいくつか見えてきている。

また、祭灯籠の保存にも地域差のあることが分かってきた。伝統の継承、人口減少や少子化、経済的な理由等で丁寧に修復・保管して灯籠を継続して使用する地域がある一方で、禊ぎや祓いの観点からこれらを保存せず、１回毎に灯籠を解体したり燃やすことで人々の厄を祓うという意味を持たせる地域もあった。加えて、保存・修復だけではなく、青森県内で使用されたねぷたの骨組や土台を譲り受ける事例があり、更に、青森ではねぶたに使用され着色された紙を素材として作られた芸術性の高いランプシェイドが販売されている。五所川原でも解体した立佞武多の着色された紙を素材にメモ帳を製作している。こうした動きは、祭り灯籠を異なった価値観によって新たな伝統を作り出していると言える。

次回の研究報告では、今回の研究報告の補足と、新たに取材した各地域の祭り灯籠の事例報告を中心に行う予定である。調査分析した全国各地の祭りの歴史背景と制作現場での取材内容が結びつき、灯籠の素材や制作方法について更に深く考察することができるものと考えている。


しれとこ斜里ねぶた・斜里町/昭和48・1973
旭川烈夏七夕まつり・旭川市
夜高あんどん祭り・沼田町/昭和48・1973
くっちゃんじゃが祭じゃがねぶた・倶知安町/昭和37・1962
八雲山車行列・八雲町/昭和57・1982
青森ねぶた祭り・青森市
五所川原立佞武多・五所川原市/1907,1994復活
黒石ねぶた祭り・黒石市
弘前ねぶた祭り・弘前市
ねぶた祭り・ねぶた祭り
（青森県広域）
小坂七夕祭・小坂町/100年の歴史
花輪ねぶた・鹿角市/藩政時代末期
能代ねぶ流し役七夕・能代市/1830年代
田楽灯ろうまつり・横手市/1969
湯沢七夕絵とうろうまつり・湯沢市/300年の歴史
酒田まつり立て山鉾・酒田市/1781–1906,2008復活
あんどんまつり・花巻市大迫町/200年の歴史
七夕祭、地蔵様まつり・村上市
けんか燈籠・新潟市広域
弥彦燈籠まつり・弥彦村
諏訪神社例大祭・佐渡市河原田地区
おぢやまつりからくり万灯パレード・小千谷市
気仙沼みなとまつり海上うんずら/気仙沼市
YOSAKOI&ねぶたinとよさと・登米市豊里町/昭和63・1988
ばんげ夏まつり・会津坂下町/昭和57・1982－平成24・2012
長沼まつり・須賀川市/昭和60・1985
四倉夏まつり・いわき市
飯田燈籠山祭・珠洲市
輪島大祭・輪島市
小木袖キリコ祭り・能登町小木地区
にわか祭り・能登町鵜川地区
たてもん祭り・魚津市
福野夜高祭・南砺市/慶安5・1652
太田市尾島ねぶたまつり・太田市/昭和61・1986
北本まつり・北本市/平成3・1991
まつりつくば・つくば市/平成9・1997
柏ねぶた・柏市/平成6・1994
キリコ祭り
（石川県奥能登地方広域）
たてもん祭り・夜高祭
（富山県広域）
みたままつり・靖国神社/平成18・2006
センター街ねぶたまつり・渋谷区
ミニ中延ねぶた祭り・品川区/平成2・1990
桜新町ねぶた祭・世田谷区/平成16・2004
羽衣ねぶた祭・立川市/平成10・1998
あさひまつりあんどん山車・越前町/昭和50・1975
湘南ねぶた・藤沢市/平成9・1997
秦野たばこ祭・秦野市/平成19・2007
柳井金魚ちょうちん祭り・柳井市/平成3・1991
八幡東ねぶた・北九州市/平成12・2000
眞田幸村公出陣ねぶた・上田市/平成21・2010
刈谷万燈祭・刈谷市/安永7・1778
粟田大燈呂・京都市/永禄10・1567,2008年復活
湊川神社夏祭りねぶた灯籠・神戸市
府内戦紙（ふないばっちん）・大分市/昭和60・1985
都城六月灯おかげ祭り
福江みなとまつり・五島市/昭和52・1977
照国神社六月灯・鹿児島市
知覧ねぶた祭・南九州市/平成8・1996
六月灯
（鹿児島県広域、宮崎県都城市広域）
灯籠を用いた全国の祭り分布図
凡例：祭りの名称・地域／開始の年代、復活の年代、
特に多い地域

謝辞

本研究の進めるにあたり、いつもまとまりのない話を聞いてくださった村上市郷土資料館の桑原猛学芸員、論文指導を賜りました長岡造形大学平山育男教授、研究のサポートをしてくれた長岡造形大学矢尾板和宣研究員に深く感謝申し上げます。また、本研究の取材や資料収集では書き切れない程多くの方々にご協力を頂きましたことに厚くお礼申し上げます。

参考文献

参考１　星野紘・芳賀日出男：日本の祭り文化事典、pp62–63、全日本郷土芸能協会、東京書籍、2006.7
参考２　福野夜高保存会、福野夜高 350 周年記念事業推進実行委員会：万燈　福野夜高三五〇周年記念誌、pp12–13、2003.3
参考３　弘前ねぷたガイド 2014：路上社、2014.8
参考４　別冊あおもり草子 2014 －ねぶた祭り、pp32,34、2014.8
参考５　足立区立郷土博物館：特別図録　地口行灯の世界、2005.9
参考６　奥能登広域圏無形民俗文化財保存委員会：奥能登のキリコまつり、pp4、奥能登広域圏事務組合、1994.3
参考７　渋谷利雄（写真）藤平朝雄（文）：能登キリコ祭り、せいしん社、1999.5
参考８　河野和夫：天下の奇祭　刈谷の万燈祭、pp13–14,44–45、愛知県郷土資料刊行会、1997.6
参考９　村瀬正章：刈谷秋葉神社の祭礼　万灯まつり、1982.7
参考 10　能代市教育委員会：眠流し行事　能代役七夕、pp165–166、1998.3
参考 11　宇野徹：加能越の曳山祭、能登印刷出版部、pp274,279–282,287–288、1997.8
参考 12　千葉作龍：名人が語る・ねぶたに賭けた半世紀、草雪舎、2014.7
参考 13　河合清子：ねぶた祭－“ねぶたバカ”たちの祭典、角川書店、2010.6
参考 14　大條和雄：ザ・ねぷた、県内出版、1982.7
参考 15　藤田本太郎：ねぶたの歴史、弘前図書館後援会、1976.5
参考 16　笹原茂未：ねぷた祭り　明治・大正・昭和、1982.7
参考 17　彌彦神社：彌彦神社、学生社、2003.12
参考 18　大谷悟（刈谷市郷土資料館　郷土文化指導員）：「万燈」にかかわる内容について（資料）、2013.1
参考 19　桑原猛（村上市郷土資料館　学芸員）：村上の七夕まつりと雪洞（資料）、2009.1
参考 20　鈴木茂雄：日本の山車まつり（上）、日本の祭り研究会、2002.8
参考 21　渡辺良正：日本の祭り　山車と屋台、サンケイ新聞社、1980.4
参考 22　柳田国男：日本の祭り、角川学芸出版、pp23、1969.8
参考 23　『能登』編集室：地産地消文化情報誌　能登 vol.20、pp46–49、2015.7
参考 24　青森県 PR ロケーションセンター：
まるごとあおもり News & Information 青森の夏はどこも熱い！ザ・ローカルねぷた、pp5–11、2011.6
参考 25　東京電気株式会社：復刻　日本燈火史、pp38、つかさ書房、1974.9
参考 26　柳田国男：柳田国男全集 16　年中行事覚書　眠流し考、pp128–129、1990.5
参考 27　青森県立郷土館：ねぶたと七夕、巻頭写真、pp5,7,18、1999.11
参考 28　黒石青年会議所：津軽ねぷた論攷　黒石『分銅組若者日記』解、1995.5
参考 29　笹原茂朱：ねぷた祭り　明治・大正・昭和、少年社、1982.7

参考 URL

参 U1：文化庁　国指定文化財等データベース　http：//kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp　2015.12 閲覧
参 U2：飯田灯籠山祭りの杜 http：//www.toshima.ne.jp/~matsuri/hiroba.html　2016.1 閲覧
参 U3：石川新情報書府　能登キリコ祭り　http：//shofu.pref.ishikawa.jp/shofu/kiriko/index.html　2015.12 閲覧
参 U4：刈谷万燈保存会公式 Website　http：//www.katch.ne.jp/~mando/index.htm　2016.1 閲覧
参 U5：ディスカバー宮崎　都城市 六月灯　http：//www.discover-miyazaki.jp/event/item_2276.html　2015.12 閲覧
参 U6：KAGOSHIMA Visitors' GUIDE　http：//kic-update.com/text/4045/　2015.12 閲覧
参 U7：鹿児島県神社庁　http：//www.kagojinjacho.or.jp/news/-27.html　2015.12 閲覧
参 U8：南日本新聞社　六月灯・夏祭り情報　http：//373news.com/_info/leisure/15rokugatsu/index.php　2015.12 閲覧

注釈

注１　阿南透：青森ねぶた祭におけるねぶた題材の変遷、 情報と社会–江戸川大学紀要、pp21,161–174、2011.03
注２　阿南透：芸術としての青森ねぶた、鈴木正崇編 『森羅万象のささやき－民俗宗教研究の諸相』、pp633–652、風響社、2015.3
注３　杉浦康平ら：アジアのデザイン文化の比較研究 山車の造形と祭礼文化を中心として、芸術工学（機関リポジトリ）、2015.11
注４　黒川朋広ら；都市における祭礼空間とその利用に関する研究：
千葉県佐原市の山車祭りの事例から、pp127–134、千葉大学園芸学部学術報告 50、1996.3
注５　鈴木章生：都市祭礼の伝統と変容、pp97–115、目白大学人文学研究 7、2011.3
注６　山口修ら；都市における祭礼空間の研究：山鹿灯籠祭りについて、pp37–38、日本建築学会 学術講演梗概集、1999.7

撮影

吉川賢一郎（写真１．３．４）、吉川周作（写真２）、矢尾板和宣（写真５～ 13）